



TITLE:

# 乳糜尿症に対するD.D.S.療法

AUTHOR(S):

石部, 知行

---

CITATION:

石部, 知行. 乳糜尿症に対するD.D.S.療法. 泌尿器科紀要 1959, 5(11): 1173-1175

ISSUE DATE:

1959-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111853>

RIGHT:

## 乳 糜 尿 症 に 対 す る D.D.S. 療 法

広島大学医学部皮膚科泌尿器科教室（主任 加藤篤二教授）

石 部 知 行

## Treatment of Chyluria with D.D.S.

Tomoyuki ISHIBE, M. D.

*From the Department of Dermatology and Urology, Hiroshima  
University, School of Medicine, Hiroshima, Japan  
(Director Prof. T. Kato)*

Dramatic effect has been obtained by a new sulfonamide, D.D.S. (manufactured by Yoshitomi Pharmaceutical Co.) in those patients whose chyluria had been resistive to the conventional treatments.

## 緒 言

Muir が 1947 年 Wevill のすすめに従つて D.D.S. を類に用いて、有効なることを報告して以来本剤の治癒性は高く評価されている。他方 *Filaria* 症の後遺症と目される乳糜尿に対しての *Heterazan* を含めての薬物療法の効果というものは、第 15 回医学総会に於ける佐藤教授の講演によつても尙完璧なものではなく、氏が本症に対する卓越した治療法が要望されているとのべられている如く、未だよい治療法のないのが現状である。

今回我々は乳糜尿症の一例に D.D.S. を使用し認むべき効果を得たのでここに報告する。

## 症 例

患者：惣○準○，62 才，男子，農業，広島県豊田郡豊町大長に生れ，同地にて生活す

主訴：ゲラチン様尿及び排尿困難。

初診：昭和 33 年 4 月。

家族歴：特記すべきものはない。

既往歴：喘息以外に特記すべきものはない

現病歴：以前に時々悪感を伴つた発熱発作があつたが、20 年位前に誘因と思われるものなく突然尿閉を来たし、導尿されたが尿が殆んど出ず苦しんだ結果 2 日位してゲラチン様のものが尿に混じて出たという。以後かかる状態が時々、特に冬期に多く発来したとい

う。最近更にかかる状態が増悪して来たので来院したものである。来院時の自覚症としては左側々腹部の軽い疼痛，retardierte und protrahierte Miktion 及び残尿感であり，以前時に Harntenesmus 及び左下肢の軽い浮腫形成がみられたこともあるという。尚近時食欲不振及び夜間一時間に一度位の頻尿があり，ために睡眠が障碍されているという。

現症：全身所見は中等大にして栄養は登，皮膚は乾燥性なるも黄疸色は認められず，血圧は 122～84mm Hg，胸部打聴診にて心濁音狭く，横隔膜は可成り低位にあり肺気腫の存在が疑われる。腹部は扁平にして軟，腎は両側共触れず，膀胱部，外陰部にも所見なく，前立腺のやや肥大せるを認めた。

検査成績：尿は乳白色に混濁，ゲラチン様で軽度蛍光を發す 蛋白（++），ウロビリノーゲン（-），細菌桿菌，球菌何れも（++），赤血球（-），白血球（+），*Filaria* 仔虫（-），脂肪球（++），血液検査では白血球  $85 \times 10^3$ ，赤血球  $325 \times 10^4$ ，血色素 70% でやや貧血がみられ，白血球分類ではリンパ球 16% と可成りのリンパ球減少症がみられるも，他に単球の増加はみられず著変をみなかつた。又夜間末梢血の誘発による濃塗標本で仔虫を明らかにすることは出来なかつた。血液理化学検査では血清蛋白 5.5 g%，A/G は 0.5，全コレステロールは 120 mg%，コレステロールエステル 90 mg% と何れも可成り低く，機能検査では B.S.P. 30 分後で 10～15% 残留し，T.T.T. 2.65，Gross 1.2 cc，高田 4 本陽性，コバルト  $R_{50}$  (3) とやや肝

は不良なるも、P.S.P. は初発5分以内、2時間値68%と腎機能には著変を認めず、Thorn のテストも正常の範囲にあつた。

膀胱鏡検査では容量 300cc 以上、内景は全体に肉柱形成著明なるも、粘膜に発赤、充血等の病変はみられなかつた。尿管の機能は左側でやや弱いが殆んど正常。左尿管口より白色に混濁せる尿の排泄を認めた。青排泄は両側共5分以内に濃染した。

逆行性腎盂撮影では左側に 20cc のヨードナトリウムを注入するも全く抵抗なく、図の如く亦溢流像も得られなかつた。即ち腎盂に病的所見を認めない

治療及び経過概括：入院後 Resochin を1日3～5錠内服せしめることによりやや症状の軽快をみたが、4ヵ月余にわたつて投与せるも治癒せず、白血球減少を來させるため中止す。以後逆行性腎盂内 0.5% Ag-NO<sub>3</sub> を 20cc 注入3回、Predonison 1日 10mg 5日間の内服、Penicillin 1日60万注5日、Maphar-zol 1号を1日1A注5日、Spatonin 1日 0.2g 12日間内服、Stibnal 1日 10cc を隔日に7回注等の非観血的療法によつては全く効果なく、ために34年1月14日左側腎被膜剝離と同時に腎基部リンパ管の結紮離断を行つた。この際腎孟部漿膜下に古野等に従つて“Sky-blue”を入れ、リンパ管の走行を確かめた上、之を完全に離断した。術後尿が可成り清澄となつたが、術後5日もすると再び白色混濁し始め排尿困難を來たし、更に食欲不振高度となり脱水症状が著明となつて來た。ここに於て輸血、輸液を行い急場をしのいだ。が尿は依然として乳白色混濁を呈せるため、2月13日 Sulfon 剤である D.D.S. を本患者に内服せしめることとした。然し誤つて1日 1.5g という大量を投与せるため翌日より嘔吐を來たし食欲全くなく使用に耐えなかつたが、内服翌日より尿が清澄となり排尿も容易となつた。よつて2月16日よりD.D.S. の 100mg を毎日筋注することに代えた。之によつて尿は翌日より全く清澄となり、以後8日間連続注、次いで隔日注3回、3日目毎に4回、4日目毎に4回、1週毎に1回計20本の注射を行い癉薬に至り現在の所2ヵ月経過せるも尿混濁は全く認められず尚経過観察中である。

## 考 按

Filaria 症は我邦に於いては北海道を除く各地に散在し、特に九州には濃厚に認められるものである。然し Filaria 症及びその後遺症と考えられる乳糜纖維尿の治療法に関しては今日の所これが適切なものが見当らない。乳糜尿症に

對する非観血療法としてはChinin, 砒素, Stibnal, Heterazan (Spatonin), BAL(山村), Penicillin (青木), Trichomycin (佐藤), 腎盂内薬物注入(田村・北川), 腎部レ線照射(皆見), Predonison (杉村) 等があるが充分な効果が期待出来なかつたし、手術的療法としては腎被膜剝離術, 腎周囲リンパ管遮断術 (Gansa, 北川, 大森, 井尻, 片峰, 岡元, 古野等), 腎剔出術(前田) 等があるが之等の方法によつても岡元例の22%の再発といった様に完治しない例も可成り存在している。

我々も田村, 北川等に従つて腎盂内薬物注入を行つたが、彼等ものべている如く本症例では図の如く腎盂に溢流現象を認め得ない症例であつたためか全く無効であつた。

更に杉村等の免疫アレルギー作用, 抗ヒアロウロダーゼ作用に基いての Predonison 療法を施行せるも之も全く無効であつた。

又腎被膜剝離リンパ管離断術の術後しばらく尿が清澄であつたのは、全くといつてよい位食餌をとらなかつたために起つたものであり、手術は全く失敗に歸した症例であると考えられる。

その他前記せる薬剤中やや有効であつたのが Resochin である。本剤は初め抗マラリア剤として使用されたものであり臨床適応としては各種の原虫性疾患がある。乳糜尿症の発生病理には腎盂腎杯へのリンパ管の直接の開孔である(林・久米)とか、アレルギー性のもの(岡村・檜原, 片峰, 田辺)とか、腎上皮細胞の透過性の亢進を主とする機能障碍(Saunes 外)といつたものがあげられているが、結局本症は Filaria 症の後遺症と目されるもので仔虫を何等かの方法で殺害するに役立つ様な薬剤、即ち Resochin が原因的にこの目的に少しでも働いたものと考えられる。

Filaria 症の熱発作に関しては古くから Filaria と他の細菌との混合感染が考えられ、事実スルファ剤の投与で軽快がみられている。ここにヒントを得て Sulfon 剤である D.D.S. を各種今までによいといわれている殆んど療法に抗せる本症に使用せる所劇的な効を得たのであ

る。乳糜尿は従来より時に自然に停止することがあるともいわれるが、我々の症例の如く使用翌日よりかかる軽快がみられたことは、本剤との関連を否定し去る訳にはいかないと思われる。更に本症の発生に対する腎盂リンパ管からリンパの腎外腎盂附近への排泄が重要視されているが、本症例では組織検査がなされていないから何んともいえないにしても、前記手術が失敗し D.D.S. が奏功した経緯よりしてかかる機構以外の本症発生機構も亦重要視さるべきであると考えられる。尙本療法についての唯一つの文献と思われるものは Muir のそれであり、彼は D.D.S. が *Filaria* 症に有効であるとのべている。しかし彼としても乳糜尿のそれに対しては何等のべていない様である。本症例では尿中、血中よりの仔虫検出は当初より陰性であり仔虫、母虫に対する影響は全く不明であるが、D.D.S. はその性格からして本症に対する根本療法の一つではないかと考えられ、今後の追試を希望するものである。

### 結 語

今日までよいといわれて来た各種療法の何れにも抗した乳糜尿症患者に Sulfon 剤である D.D.S. を使用し劇的効果を得たのでここに報告した。

本稿の要旨は第28回日本皮膚科泌尿器科学会広島地方会に於て発表した。

稿を終るにあたり御校閲を賜った恩師加藤教授に深謝すると共に、D.D.S. 文献に関し御援助をうけた京大特別研究所原田学士、並びに試供品を提供された吉富製薬株式会社に対し深謝する。

### 文 献

- 1) 青木：日泌尿会誌，**46**：659，1955.
- 2) Floch Internat. J. Leprosy, **18** 177, 1950.
- 3) 同上：同 上，**18**：535，1950.
- 4) 古野：泌尿紀要，**3**：500，1957.
- 5) 原田：レプラ，**23**：355，1954.
- 6) 片峰：臨床と研究，**31**：5，1954.
- 7) 皆見：日泌尿会誌，**28**：35，1928.
- 8) Muir：Internat. J. Leprosy, **12**：1，1944.
- 9) 同上：同 上，**18**：18，1950.
- 10) 同上：同 上，**18**：299，1950.
- 11) 岡元：鹿児島医大紀要，**4**：30，1953.
- 12) 同上：日泌尿会誌，**45**：256，1954.
- 13) 同上：皮と泌，**16**：534，1954.
- 14) 佐藤：鹿大医学雑誌，**8**：760，1956.
- 15) 同上：同 上，**9**：1520，1958.
- 16) 杉村：泌尿紀要，**4**：721，1958.
- 17) 山本：D.D.S. による癩の治療，別刷（長島紀要原稿）



retrograde Prelogramm